■（７４）記者の視点「卒業」「入学」でリフレッシュ

東北の学校は卒業式目前で、紅白の幕が飾られた体育館がそのまま避難所になった学校もあった。そのまま学習どころではなくなり、１カ月過ぎても、ほとんどの学校で入学式や始業式ができなかった。子どもらが通学できるようになったのは、東北でようやく桜の季節となる５月の大型連休のころだった。そんな東日本大震災の発生から１年過ぎた。

被災地の取材も２年目に入る。甚大な被害の地を中心に置かれた取材拠点はそのまま残り、ほとんどの記者は引き続き情報発信を続ける。ただ、新しい視点も不可欠となる。人事異動という形で、首都圏や西日本から新たな記者が被災地に赴任していく。首都圏や西日本で震災を風化させないためにも、新しい観点で書く記事がますます求められる。学校が毎春、卒業と入学を経て、新しい活力を生んでいくのとどこか似ているようだ。

新聞にとって春は、記者の配置転換とともに、紙面の構成をも見直す時期。先生や子どもに関心を持ってもらえる新聞になっているか。しばらくはみなさんの採点を待つ受験生の立場です。私自身も近く、被災地を離れます。再び東京から被災地を見続けます。（山）